



# 日本地球化学会ニュース

No. 200 March 2010

## Contents

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| 2010年度日本地球化学会年会のお知らせ(1).....     | 2  |
| 学会からのお知らせ.....                   | 2  |
| 新会長あいさつ                          |    |
| 「地球化学」編集委員長あいさつ                  |    |
| 評議員会議事録.....                     | 3  |
| 2009年度第3回・第4回                    |    |
| 研究集会報告とお知らせ.....                 | 9  |
| 鳥居基金助成実績報告 (TE-62, TE-63, TE-65) |    |
| 2010日本地球惑星科学連合2010年大会            |    |
| 院生による研究室紹介 No. 15 .....          | 12 |
| 北海道大学低温科学研究所 大気環境分野 環境地球化学研究室    |    |

## 2010年度日本地球化学会年会のお知らせ(1)

主催：日本地球化学会

会期：平成22年9月7日(火)～9日(木)

会場：立正大学熊谷校舎

埼玉県熊谷市万吉1700

・熊谷駅（JR高崎線，上越・長野新幹線，秩父鉄道）南口より国際十王バス立正大学行で立正大学下車（所要時間約10分）

・森林公園駅（東武東上線）北口より国際十王バス立正大学行で立正大学下車（所要時間約12分）

アクセスについては，下記のサイトを参照ください。

[http://www.ris.ac.jp/guidance/cam\\_guide/kumagaya.html](http://www.ris.ac.jp/guidance/cam_guide/kumagaya.html)

内容：口頭発表及びポスター発表（今回は2009年度年会と同様に，全ての発表を30程度のセッションの中で行います），学会賞記念講演，総会，懇親会。

締切：講演申込及び要旨提出（昨年と同様に，同時に行ってください）：7月12日(月)（予定）

事前参加登録：8月20日(金)（割引料金を適用）（予定）

各種申込は学会のホームページ上から行いますが，その詳細については次号のニュース，あるいは学会のホームページをご覧ください。なお，ホームページからの申込が困難な方は年会事務局にそれぞれの締切の1週間前までにご連絡ください。

年会のホームページは4月上旬に開設します。

関連イベント：市民講演会（9月5日）

第5回地球化学ショートコース

（9月6日）

（詳細は次号のニュースでお知らせします）

小集会：学会期間中の昼食時間，あるいは講演終了後に小集会を行うことができます。希望のあるグループは年会事務局に問い合わせてください。

年会事務局：

〒360-0194 熊谷市万吉1700

立正大学地球環境科学部内

2010年度日本地球化学会年会事務局

E-mail：gcsj 2010@ris.ac.jp

## 学会からのお知らせ

### ●新会長あいさつ

日本地球化学会会長 海老原充

蒲生前会長の後を受けて，2010より2年間会長を務めさせて頂くことになりました。地球化学とは元素や同位体の量およびその変化を通して，地球化学的現象を解明する学問と言えるでしょう。この地球化学的現象としては，太陽系や地球の誕生・進化から，過去・現在の地球の環境まで，実に多岐にわたる現象を含みます。日本地球化学会はその前身の地球化学研究会を含めると，その歴史は50年を越え，もうじき60年になろうとしています。この間の先輩諸氏の努力によって，地球化学研究会発足当時の200名から1,000人の会員を擁するまでになりました。

しかしながら，地球化学会を取り巻く昨今の状況は決して安心できるものではありません。と言うよりも，むしろある意味で転換期にさしかかっているといえます。地球化学会の活動は英文誌“Geochemical Journal”と和文誌「地球化学」の発行，および年会の開催に集約されるでしょう。前会長の下でのGJの電子出版化への転換，年会開催への評議員会の支援等，すでに新たな取り組みが始められて来ました。今後，これらの活動を堅持し，更に発展させるためには財政のさらなる健全化が必須です。その為の何らかの解決策を見出すことが今期会長の最重要任務であると考えています。

財政の健全化と同じくらい重要な課題として学会の法人化問題が挙げられます。これらの問題はある意味でお互いに関連する側面を持ちます。学会の法人化は時代の要請であり，流れであることは間違いありません。現時点では緊急に法人化すべき状況にはありませんが，近い将来，法人化を真剣に考えざるを得なくなることは間違いないでしょう。今期はこうした流れを見据えて，法人化に対して多角的に検討して，準備を進めたいと考えています。

今期の活動の主な柱は上記の2点に集約されますが，他にも会の活性化に結びつく様々な活動をきめ細

かく実施していく所存です。地球化学会の事業を円滑に実施する為に評議員会が設置されていますが、今期は評議員会に加えて幹事会の活動もこれまで以上に強化し、出来るだけ多くの会員のご協力を得ながら活動していきたいと考えています。地球化学会の発展の為に微力ながら、最大限の努力を傾ける所存です。会員諸氏のご協力を切にお願いいたします。

### ●「地球化学」の編集委員長の交代

編集委員長 高橋嘉夫

本学会の和文誌「地球化学」の編集委員長は、本年1月より益田晴恵（大阪市立大）から高橋嘉夫（広島大）に交代しました。

昨年の第4回評議員会では、「地球化学」の年発行回数について検討してほしいとの要望がありましたが、最終的に「地球化学」の果たす重要な役割に鑑み、現在の年4回発行を当面継続することになっております。このような「地球化学」に対する期待に応えるべく、充実した邦文誌にするために、「地球化学」編集委員会は努力を尽くしていく所存です。

和文誌の役割は、会員や将来を担う若手研究者に original paper の発表の場を提供することにあります。そしてそれ以上に、優れた総説を多く掲載し、最先端の地球化学や他分野との境界領域を知るために最適の媒体となることも重要だと考えています。「地球化学」には、既に「総説」、「企画総説」、「日本の地球化学」などのカテゴリーが設けられていますので、優れた総説記事が多く掲載できるよう編集委員会は努力すると共に、会員の皆様のご協力を頂ければと思います。

論文や掲載記事などの投稿は、高橋嘉夫あてにご送付下さい。送付先は以下のとおりです。電子メールでの投稿も歓迎いたします。

〒739-8526 広島県東広島市鏡山1-3-1  
広島大学大学院理学研究科地球惑星システム学専攻  
高橋嘉夫  
Tel : 082-424-7460, Fax : 082-424-0735  
E-mail: chika@geochem.jp

## 評議員会議事録

### ●日本地球化学会2009年度第3回評議員会議事録

日時：2009年9月14日(月) 14:00~18:15

場所：広島大学理学部・理学研究科 A 017室

(大学院講義室)

出席者：蒲生俊敬会長、海老原充副会長、石橋純一郎、小畑元、佐野有司、鈴木勝彦、角皆潤、平田岳史、益田晴恵、南雅代（以上幹事）、天川裕史、植松光夫、鍵裕之、北逸郎、中塚武、奈良岡浩、日高洋、松本拓也、三村耕一、坂本尚義（以上評議員）

#### 1. 2009年度第2回評議員会議事録の承認

#### 2. 報告事項

- (1) 庶務（小畑幹事）：【研究助成等】2009年第2回鳥居基金助成、応募7件（海外渡航5件、国内研究集会2件、7.31）。【後援・共催等】共催：Goldschmidt 2009（ダボス・スイス、6.21~26）；第53回粘土科学討論会（岩手、9.10~11）；協賛：地学オリンピック日本委員会（協賛金10万円、6.29）。【庶務その他】地球化学 Vol. 43（特別号）日本地球化学会ハンドブック2009の編集（電算印刷へ入稿、7.13）；地質地盤情報に関するアンケート調査への回答（NPO地質情報整備・活用機構より依頼、8.19回答）；特許法30条に基づく指定学術団体に対する活動状況調査への回答（特許庁、8.19回答）；学会賞等賞状・メダル製作（9.7）。【幹事会】2009年9月5日 13:00~17:10 東京大学山上会館 第3回評議員会の議事内容について整理した（出席：蒲生・海老原・石橋・小畑・佐野・鈴木・益田・南の各幹事）。【今後の予定】2009年総会：9月16日(水) 13:30~15:00 広島大学東広島キャンパス理学部 E 1022009年第4回評議員会：9月17日(木) 12:30~ 広島大学東広島キャンパス理学部 A 017室。
- (2) 会計（南幹事）：2009年度中間決算が審議事項とともに報告された。
- (3) 会員（角皆幹事）：8月末時点の会勢について報告があった。正会員総数は972名で、昨年同期と比較すると合計は4名の増加だが、一般正会員は昨年同期より15名減少。学生会員（12名増）とシニア会員（7名増）の増加が、一般正会員の減少を補っている。また、7月末日付けで名簿号を発行した（印

刷は電算印刷(株)。連絡先、所属について、非公開希望した会員が多数あった。さらに、8月末時点の3年会費滞納者が報告された。

会員異動 (2009/6/1~2009/8/31)

【入会】

(6月)

一般正会員

9282618 川村紀子 カワムラノリコ  
海上保安大学校基礎教育講座

学生パック

9282614 松倉誠也 マツクラセイヤ  
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻

9282615 中川麻悠子 ナカガワマユコ  
東京工業大学大学院総合理工学研究科化学環境学専攻

9282621 佐藤晋太郎 サトウシンタロウ  
北海道大学理学部地球科学科

9282623 佐久間博基 サクマヒロキ  
北海道大学大学院理学院

9282628 内藤裕一 ナイトウユウイチ  
東京大学新領域創成科学研究科

(7月)

一般正会員

9282624 松永 壮 マツナガソウ  
財団法人石油産業活性化センター自動車・燃料研究部

9282625 森川佳太 モリカワケイタ  
株式会社ダイヤコンサルタント地盤・地下水解析センター地盤環境グループ

9282634 近本めぐみ チカモトメグミ  
(独)海洋研究開発機構地球環境変動領域

9282637 川瀬雅也 カワセマサヤ  
長浜バイオ大学バイオサイエンス学部

学生パック

9282619 安齊沙耶 アンザイサヤ  
北海道大学理学部地球科学科

9282620 大山拓也 オオヤマタクヤ  
北海道大学理学部

9282627 山田明憲 ヤマダアキノリ  
東京大学理学系研究科地球惑星科学専攻

(8月)

一般正会員

9282542 藪田ひかる ヤブタヒカル  
大阪大学理学研究科宇宙地球科学専攻松田准一教授研究室

9282636 吉田 磨 ヨシダオサム  
酪農学園大学環境システム学部生命環境学科環境地球化学研究室

学生通常

9282633 塚崎あゆみ ツカサキアユミ  
名古屋大学環境学研究科地球環境科学専攻物質循環科学講座

9282635 松本恭平 マツモトキョウヘイ  
富山大学理工学教育部生物圏環境科学専攻

学生パック

9282630 長島加奈 ナガシマカナ  
大阪大学宇宙地球科学専攻惑星グループ松田研究室

9282631 荒川裕子 アラカワユウコ  
大阪大学理学研究科地球惑星科学専攻惑星科学グループ

【退会】

(6月)

なし

(7月)

なし

(8月)

なし

【会員種別変更】

(6月)

| 会員番号    | 会員名   | 変更前   | 変更後 |
|---------|-------|-------|-----|
| 5282306 | 池端 慶  | 学生正会員 | 一般  |
| 9282480 | 昆 慶明  | 学生正会員 | 一般  |
| 4282325 | 白井厚太郎 | 学生正会員 | 一般  |
| 5282276 | 田副博文  | 学生正会員 | 一般  |

(7月)

なし

(8月)

9282373 島村道代 学生 一般

2009年8月31日現在の会員数

|                 | 一般<br>正会員 | 学生正会員<br>(学生バック<br>除く) | 学生<br>バック | シニア<br>正会員 | 賛助会員 | 名誉会員 | 計   | 在外会員 |
|-----------------|-----------|------------------------|-----------|------------|------|------|-----|------|
| 2009.6.1        | 751       | 65                     | 54        | 63         | 11   | 9    | 953 | 38   |
| 入会              | 7         | 2                      | 10        | 0          | 0    | 0    | 19  | 0    |
| 退会              | 0         | 0                      | 0         | 0          | 0    | 0    | 0   | 0    |
| 逝去              | 0         | 0                      | 0         | 0          | 0    | 0    | 0   | 0    |
| 除名              | 0         | 0                      | 0         | 0          | 0    | 0    | 0   | 0    |
| 種別変更<br>(増)     | 5         | 0                      | 0         | 0          | 0    | 0    | 0   | 0    |
| 種別変更<br>(減)     | 0         | -5                     | 0         | 0          | 0    | 0    | 0   | 0    |
| 海外へ移住           |           |                        |           |            |      |      |     | 0    |
| 海外より帰国          |           |                        |           |            |      |      |     | 0    |
| 2009.8.31       | 763       | 62                     | 64        | 63         | 11   | 9    | 972 | 38   |
| 参考<br>2008.8.31 | 778       | 54                     | 60        | 56         | 11   | 9    | 968 | 38   |

(4) 編集：

- a. GJ (佐野幹事)：GJについて、佐野幹事より報告があった。2009年 No. 3は6月末に配布され、No. 4もすぐに配布される予定であることが報告された。続いて8月28日での編集状況が報告された。2009年5月15日から、38報（内訳：日本人は16報）が投稿され、19報（内訳：日本人は9報）が受理されている。今年度の投稿論文のうち、29報が却下され、51報が審査中であり、AE 選考中が2報ある。また、現在2つの特集号（9th ICGG；故酒井均先生追悼）が編集集中であるとも報告された。現在のところ、31報が印刷待ちの状態にあり、2つの特集号も動いているので一時期の受理論文不足は解消されているとのことであった。却下された29報の投稿論文の内、9報はAEに回す前に編集長のレベルでrejectしていることなども報告された。また、最新号No. 4の著者はすべて中国の研究者であることも指摘された。
- b. 地球化学（益田幹事）：「地球化学」について、益田幹事より報告があった。2009年度3号は9月初旬に発行した（報文1編、受賞記念論文1編、博士論文抄録1編）。特集号は4号に発行する。2009年1月から報文が8報投稿され、4編を受理、1編を却下、3編を審査中である。総説は2報投稿され、1編を受理、1編を審査中である。受賞記念論文については、5編投稿され、2編を受理、3編を審査中である。博士論文抄録については、3編が投稿され、3編が受理された。投稿数が減っているため、投稿を促すべきとの報告があった。また、掲載論文の著作権を「地球化学」編集委員会に帰属させるた

めの手続きと、その手続きの文書化を、年会期間中の編集委員会で検討する。なお、次期編集委員長（2010年から）については、高橋嘉夫会員が就任する予定であるとの報告があった。

- c. ニュース（石橋幹事）：石橋幹事より、ニュース電子メール版を、2009 No. 088～148まで61件（8月31日現在）配信したとの報告があった。内訳は、学会からの連絡（含む年会）18件、GJコンテンツ3件、地球惑星科学連合・連合大会関連4件、化学連合関連5件、研究集会・国際学会・講演会など案内6件、教員・研究員公募情報19件、研究助成・共同利用・事業提案・研究計画など募集3件、学術賞推薦募集3件であった。

ニュースレター No. 197を「地球化学 Vol. 43, No. 2」巻末で発行し（6/25）、No. 198を「地球化学 Vol. 43, No. 3」巻末で発行（8/31）した。No. 199の予定（12月発行予定）も紹介された。

- (5) 広報（鈴木幹事）：鈴木幹事より、広報委員会の活動について報告があった。学会ホームページについては、Goldschmidt 2009を機に英語ページの更新を行った。まだ完成していないので、継続して日本語ページから英訳し、更新する予定である。また、学会ホームページのトップページで学会員の最新成果が紹介され、月に2～4回の更新が行われている（松本委員担当）。さらに、GJの編集委員会で最新号に掲載された論文から editor's choice を選び、GJの最新号がウェブに掲載されるタイミングで、トップページで宣伝する。トップページでは、学会員の最新著書の紹介、学会各賞・鳥居基金の受賞者紹介、学会の様子を表す写真なども掲載していく予定である。Q&A ページは、更にページを充実させるため、新たな質問を追加する予定である（丸岡委員担当）。ウェブ広告については、広告費が高いという意見があったので、年間12万円に変更する。さらにホームページ広告掲載企業に、学会メールニュースで年12回の宣伝を認めることとなった。広報委員を中心にいくつかの業者に広告掲載を打診しているが、評議員にも取引のある業者に広告掲載を打診するように要請があった。

また、昨年同様、年会で報道機関に対して、各セッションからハイライト講演1件を選んで、プレスにその情報を投げ込むことになった（橘委員担当）。各セッションコンビーナにハイライト講演選択を依頼した。

Goldschmidt 2009に学会ブースを出展した(下田委員, 折橋委員担当)。学会ブースでは, 学会の旗の掲示, GJ (印刷版および CD-ROM) の無料配布, 学会のパンフ, GJ の Express Letter のチラシ (200部) の配布を行った。また, GJ 賞の Kusakabe *et al.* (2008) の論文別刷をブースにおいて配布した。ブースは人通りが多い, 非常にいいロケーションであったために, 学会員, 非会員問わず, 多くの学会参加者が立ち寄り, GJ は CD, 印刷版ともに学会前半で無くなった。これらの Goldschmidt 会議の様子は, 学会のニュース (印刷版) に掲載される (下田委員)。

年会のブースにおいては, 地球化学講座を販売する予定である。また, GJ の CD, 印刷版, 「地球化学」誌のバックナンバー, 学会の入会案内, GJ の Express Letter のチラシの配布も行う予定である。

講師派遣について, 登録用紙を現在作成中である (山本委員, 小木曾委員担当)。登録を年会で行い, 各広報委員・評議員の地元教育委員会 (できれば都道府県レベル) に講師派遣について宣伝する。学会における講師派遣では, 講師募集と登録派遣リクエストへの対応と仲介を行う。交通費の実費は派遣先が負担し, 謝礼なし, を原則とする。講師 1 人あたり派遣回数は年一回を基本とし, 登録者 30 人を目指す。

また, 学会パンフレット・GJ チラシ配布についての要請があった。

- (6) 行事 (平田幹事): 平田幹事より, 日本地球惑星科学連合大会について報告があった。日本地球惑星科学連合大会は 2009 年 5 月 16 日から 21 日まで, 幕張メッセ国際会議場で開催された。本年度発表者数は 3,088 件 (昨年度比 4% 減) で最近 5 年間はほぼ横ばいであり, 有料登録者数は 3,500 人 (5 月 20 日現在) で 2008 年度 (4,025 人) に比べて 10% 減となった。日本地球化学会では展示ブースを開設し, 学会活動のアピール, 地球化学講座シリーズの販売, ショートコースパンフレットの配布などを行った。広報委員に大きな負担をかけているので, 展示形態・ブース運営方法を再検討すべきではとの指摘があった。地球化学会と地球惑星連合との連携強化を念頭に, 年会の運営形態を議論してはどうかとの意見があった。

また, ゴールドシュミット国際会議が 2009 年 6 月 21 日から 26 日にかけてスイス・ダボスで開催された

ことが報告された。日本地球化学会会員は 50 ユーロ割引 (早期登録の場合, 登録料が 470 ユーロのところ 420 ユーロに割引) の優遇措置があった。日本地球化学会は Exhibition で展示ブースを開設した。2010 年は米国テネシー, 2011 年はチェコ・プラハで開催予定とのことであった。

続いて, 地球化学会の 2009 年年会 (平成 21 年 9 月 15 日~17 日, 広島大学理学部) についても報告が行われた。大会実行委員長は清水洋会員。開催形式は 2008 年度と同じセッション制 (すべての発表を 30 程度のセッションの中で行う)。7 月 13 日 (月) に講演申し込みが終了し, 約 340 件の申し込みがあった。学会賞記念講演, 総会, 懇親会, 夜間集会等を予定であることが報告された。さらに, 日本地球化学会年会にあわせて開催される第 4 回ショートコースについて報告があった。平成 21 年 9 月 14 日 (月) 午前 9 時 30 分~夜 6 時頃まで, 広島大学東広島キャンパス理学部 E 棟 104 号室 (E 104) において開催される。定員 50 名, 参加費 3,000 円 (地球化学会学生会員は学会からの補助により 2,000 円引) である。8 月 25 日現在で 21 名の参加申し込みがあった。プログラムについても紹介された。

日本地球化学会 2010 年度年会についても報告があった。2010 度の日本地球化学会年会は, 立正大学 (熊谷キャンパス) で開催予定であり, 大会実行委員長は福岡孝昭会員。開催時期, 開催方式, 運営方式 (評議員による LOC 支援) 等について議論を開始したことが報告された。

- ・2009 年年会 (日高評議員): 2009 年度日本地球化学会年会準備状況について, 2009 年度年会 LOC の日高評議員より報告があった。年会に先駆け, 市民講演会「宇宙・太陽系の進化と現在の姿」ならびに東広島天文台見学会を 9 月 13 日 (日) 13:00~17:00 に開催されたことが報告された (参加申込者 33 名)。年会の各種受付については, 7 月 17 日 (金) に講演申込が締め切られた。講演申込は 342 件 (内訳: 口頭 259 件, ポスター 83 件) であった。8 月 28 日 (金) に事前参加登録が締め切られた。申込は 304 名 (内訳: 名誉会員 2, 一般会員 173, 学生会員 32, 一般非会員 23, 学生非会員 74) であった。また, 8 月 17 日 (月) に年会 web page 上で年会講演プログラムが公開された。さらに, 9 月 1 日 (火) に J-STAGE 上で講演要旨が公開された。企業展示は 13 件, 要旨集への広告は 19 件を受入れた。企業展示会場はポスター会場と同

じP会場を使用する。地球化学会ニュース No. 198 用に、「年会のお知らせ③」および年会プログラムの原稿を作成し、石橋幹事に送付した。さらに、9月15日開催予定の年会キャリアパスセッション「地球化学から教育界へのキャリアパスの模索」を一般公開として対応することとし、同セッションならびに市民講演会「宇宙・太陽系の進化と現在の姿」を日本地球化学会公開イベントとして取り扱い、広島大学広報グループを通してプレスリリースした(9月1日)。その他、年会の各セッションの講演の中で注目に値するものをコンピナーに推薦してもらい、広報委員会を通して報道機関へ投げ込みを行うこととした(9月1日に依頼メール配信)。また、各評議員に対し、ポスター賞審査の依頼があった。

#### (7) 各種委員会

- a. 鳥居基金委員会(平田委員): 2009年度第2回鳥居基金選考結果について、中井俊一鳥居基金選考委員会委員長の代理として、平田委員から報告があった。2009年度第2回鳥居基金に応募された海外渡航5件、国内研究集会2件から、海外渡航、国内研究集会ともに1件ずつの助成が推薦された。国内研究集会としては、2009年度日本地球化学会若手シンポジウム(山田健太郎会員)、海外渡航としては、光延聖会員(ゴールドシュミット国際会議2010, 2010.6.12~6.18)が選ばれた。
- b. 選挙管理委員会(天川委員長): 2010~2011年度役員選挙の結果について、天川選挙管理委員会委員長より報告があった。有効投票は173票であり、海老原充会員が会長に、吉田尚弘会員が副会長に、松久幸敬会員が監事に選ばれた。評議員として、鍵裕之会員、鈴木勝彦会員、高橋嘉夫会員、中井俊一会員、山本鋼志会員、川幡穂高会員、下田玄会員、谷水雅治会員、松本拓也会員、橘省吾会員、丸岡照幸会員、平野直人会員、野尻幸宏会員、三澤啓司会員、山中寿朗会員、西尾嘉朗会員、瀧上豊会員、谷本浩志会員、松枝秀和会員、川口慎介会員が選ばれた。
- c. 将来計画委員会(海老原委員長): 将来計画委員会の活動について、海老原委員長より報告が行われた。GJなどの出版事業について委員会を設けることを検討中との報告があった。
- d. 「地球と宇宙の化学事典」編集委員会(蒲生会長): 蒲生会長より「地球と宇宙の化学事典」の編集状況について報告があった。項目・執筆者・ペー

ジ数が確定され、執筆依頼を現在行っていると報告された。原稿の締切を2010年2月末とし、締切厳守とすることが確認されている。2011年春頃の刊行を目指している。

- e. 地球化学講座の編集状況について(蒲生会長): 蒲生会長より、第8巻について近日刊行される見込みとの情報が田中剛会員からあったことが報告された。

#### (8) 連合関係:

- a. 日本地球惑星科学連合総務委員会(平田委員): 平田委員より、日本地球惑星科学連合総務委員会の活動状況について報告が行われた。委員会は連合大会会期中(2009年5月20日(水))に開催された。連合大会の参加者数、総務委員の任期、会員管理小委員会設立、法人化の経緯と現状などについて話し合われたとの報告があった。
- b. 日本地球惑星科学連合代議員選挙(蒲生会長): 日本地球惑星科学連合代議員選挙に対する日本地球化学会の対応が蒲生会長から報告された。各セッションにおいて、日本地球化学会会長から代議員を推薦することとなった。
- c. 日本化学連合(海老原副会長): 日本化学連合の活動について、海老原副会長より報告が行われた。

#### (9) IAGC 関連(海老原副会長): IAGC の活動について、海老原副会長より報告が行われた。

- (10) その他: 「地学オリンピック日本委員会」の活動報告が瀧上評議員より送られ、小畑幹事が代理で報告を行った。2012年の国際地学オリンピックは日本で開催される予定であることが報告された。また、GJの電子化を進めるため、入会・変更申込書の「GJの入手法について」の文面を変更することが報告された。

#### 3. 審議事項

- (1) 2008年度事業報告・2009年度事業中間報告・2010年度事業計画(小畑幹事): 小畑幹事より、2009年度総会で審議・報告する「2008年度事業報告・2009年度事業中間報告・2010年度事業計画」が示された。審議の結果、字句の修正後、総会において承認を受けることが認められた。
- (2) 2008年度決算報告・2009年度会計中間報告・2010年度予算(南幹事): 南幹事より、2009年度総会で審議・報告する「2008年度決算報告・2009年度会計中間報告・2010年度予算」が示された。審議の結

果、字句の修正後、総会において承認を受けることが認められた。

- (3) 2009年度総会議事次第（小畑幹事）：小畑幹事より、2009年度総会議事次第が示され、承認された。
- (4) 委員（学会賞等選考委員、鳥居基金委員）の選挙：2010年度の学会賞等選考委員、鳥居基金委員について、一部改選が行われた。投票の結果、学会賞等選考委員には坂本尚義会員、吉田尚弘会員が選ばれ、鳥居基金委員には蒲生俊敬会員が選ばれた。
- (5) 日本地球惑星科学連合各種委員の選出について（蒲生会長）：日本地球惑星科学連合のプログラム委員を今後どのように選出するかについて審議が行われた。現委員から1年1名ずつ交替することが提案され、承認された。但し、2010年度からプログラム編成が大きく変わる可能性があるため、その動向を見極めながら対応していくこととなった。
- (6) その他：特になし

#### 4. 次回の評議員会の日程

第4回評議員会：9月17日(木) 12:30~

広島大学理学部 A 017室（大学院講義室）

2009年度評議員から2010~2011年度評議員への引き継ぎを行う。

#### ●日本地球化学会2009年度第4回評議員会議事録

日時：2009年9月17日(木) 12:30~13:00

場所：広島大学理学部 A 017

出席者：蒲生俊敬会長、海老原充副会長、石橋純一郎、小畑元、佐野有司、鈴木勝彦、角皆潤、平田岳史、益田晴恵、南雅代（以上現幹事）、天川裕史、岩森光、植松光夫、鍵裕之、北逸郎、中塚武、奈良岡浩、日高洋、松本拓也、三村耕一、坂本尚義（以上現評議員）、吉田尚弘、川口慎介、下田玄、高橋嘉夫、橘省吾、谷水雅治、谷本浩志、西尾嘉朗、丸岡照幸、三澤啓司、山本鋼志（次期評議員）

#### 議事内容

1. 2006~2007年度評議員会からの申し送り事項への対応
- 1) 地球化学が主導する学術活動（いくつかの分野での科学研究費など）の立ち上げを実際に実行してほしいとの要望があったが、学会として特に目立った動きはなかった。

2) Geochemical Society (GS) などに対し、Council 選挙のときには、日本地球化学会からも候補者を立てるなど、積極的な参入を是非してほしいとの要望があった。この点については、IAGC（国際地球化学連合）の評議員として益田晴恵評議員が選出され（2008年から4年間）、GSの米国外評議員として佐野有司評議員が推薦される（2009年8月）などの動きがあった。

3) Goldschmidt 会議での GJ 賞の授賞式を継続するため、次期開催地の委員会と密接に連絡を取るようとの要望があった。また、Goldschmidt 会議での日本地球化学会の PR（ブース展示など）を積極的に行うが要望された。さらに、Goldschmidt 会議でのセッションの提案も積極的に行ってほしいとの要望があった。この Goldschmidt 会議との関係においては、2008年、2009年と本学会の参加者には登録費の割引が適用されるなどの優遇措置が取られた。また、GJ 賞授賞式は継続して実施され、ブース展示も積極的に行われた。特に今季より新設した広報委員会により PR 活動は著しく強化された。さらに、本学会員がコンピーナーを務めるセッションもあり、貢献度は増しつつある。

4) アジアにおける地球化学の連携を是非推進してほしいとの要望があったが、目立った活動はなかった。

5) 年会開催時のルール（学会として決めてある事項、LOC が決めて行う事項など）の確立を行ってほしいとの要望があり、将来計画委員会を中心に年会開催方式について検討された。この結果、LOC と学会との役割分担が明確化された。

6) GJ の完全電子化に向けた準備をしてほしいとの要望があった。この点については、冊子体を受け取らず、web から閲覧するシステムを確立した（現在約半数の会員がこのシステムに移行）。

7) 地球化学の年発行回数について検討してほしいとの要望があったが、「地球化学」の果たす重要な役割に鑑み、現在の年4回発行を当面継続することとなった。

8) 評議員の選挙方式について、地域ブロック制の是非を含め再検討してほしいとの要望があり、将来計画委員会を中心に検討が行われた。この結果、選挙方式を改訂し、地域ブロック制を廃止することとなった。

9) 会員の増強について、終身会員の創設なども含め



さらに検討してほしいとの要望があった。また、年会参加費の割引なども含め、会員であることのメリットを十分明確にしてほしいとの要望もあった。会員数については、946名(2007年8月31日)から972名(2009年8月31日)へ増加の傾向にある。年会参加費、ショートコース参加費などで、会員優遇を明確化している。

- 10) ホームページ上での質問応答、プレス発表なども含め、社会へのPRも積極的に行ってほしいとの要望があった。この点については、学会webに「地球化学Q&A」のコーナーを作り、「地球化学質問箱」を設けて対応している。また、年会時にプレスリリースも、広報委員会を中心に実施した。
- 11) 会費未納者の取扱について、しっかりしたルールを確立してほしいとの要望があり、3年滞納者を除名する方式を軌道に乗せた。
- 12) 名簿発行の是非について検討してほしいとの要望があった。この点については、将来計画委員会を中心に検討を行った。現在、冊子体を廃止し、Web名簿管理(MyPage)に移行する方向で作業が進められている。
- 13) 地球化学講座の全巻完成を目指してほしいとの要望があった。この点については、第8巻の刊行が目前となっていることが報告されている。

## 2. 2010~2011年度評議員会への申し送り事項

- 1) IAGC(国際地球化学連合)やGeochemical Society(米国地球化学会)との国際連携を一層活性化してほしい。IAGCの国内対応体として日本学術会議に設置されているIAGC小委員会の活動を強化してほしい。
- 2) Goldschmidt会議における本学会のスポンサーとしての定位置を堅持し、GJ賞の授賞式、ブース展示、参加登録費の割引適用など継続してほしい。また、Goldschmidt会議でのセッションの提案を積極的に行ってほしい。
- 3) 学会の法人化について、学会の対処方針を明確にし、他学会の情勢や連合内での本学会の位置づけも考慮しながら、検討を進めてほしい。
- 4) Geochemical Journalの現状と中長期的な展望について議論し、地球化学分野の代表的国際誌としての地位や知名度を一層高めてほしい。学会員の投稿を増やす努力をしてほしい。Web閲覧者の増加に努めてほしい。またimpact factorの上昇を

期してほしい。

- 5) 「地球化学」の和文誌としての評価・役割を一層高めるとともに、論文の著作権(過去の論文も含めて)を学会で保有するシステムを確立してほしい。また、「地球化学」の電子化(印刷経費の縮小のため)についても長期的視点から検討を続けてほしい。
- 6) 学会員への特典の維持・拡張を図るとともに、日本地球惑星科学連合との棲み分けを明確にし、現在の会員増加傾向を維持してほしい。
- 7) 学会webページ上での質問応答、年会時のプレス発表、講師派遣など、学会から一般社会へのPRをいっそう積極的に行ってほしい。
- 8) 冊子体の名簿号を廃止するにあたり、これまで名簿号に合本されてきた「日本地球化学会ハンドブック」については、適宜学会web siteへの移植を進めてほしい。
- 9) 各幹事・委員会への活動経費支給方式の見直しを行い、必要な経費が適時適切に支給される会計システムを構築してほしい。
- 10) 「地球と宇宙の化学事典」の編集作業を鋭意進めてほしい。  
以上の要望が出された。



## 研究集会報告とお知らせ

### ●鳥居基金助成実施報告

#### 2009年度第1回「鳥居基金」助成実施報告(TE-62)

氏名(所属): 森 俊哉(東京大学大学院理学系研究科)

助成: 国内研究集会

課題: 2009年度火山性流体討論会

火山性流体討論会は、火山ガス・マグマ・熱水系流体・超臨界流体・地下水等の観測やモデリングの話題を中心に、地球化学的面はもちろんのこと、地球物理学や地質学も織り込みながら議論する討論会です。討論会の趣旨は、できるだけ参加者全員が発表し、討論に十分に時間をかけること、そして、学生を含んだ若手研究者と中堅研究者との距離を縮め親睦を図ることです。ここ数年参加者が増え昨年度は30名を超える討論会になりました。参加者の増加は喜ばしい一方で、

一人一人の発表に十分な討論の時間を確保できないというジレンマを抱えています。2009年度の討論会では、一人の持ち時間を十分に取ることを優先課題として運営しました。

討論会は、2009年6月19日(金)~21日(日)の2泊3日の日程で、昨年に引き続き茨城県常総市のあすなろの里で開催しました。参加者は、大学院生9、PDを含めた若手研究者8、中堅5名で、発表件数は20件でした(一部の中堅は時間の都合上、議論専門で奮闘してもらいました)。今回は発表スケジュールを細かく決めず、数時間の時間枠の中に、数名の発表を置くという形で進行了。また、日中に終わらなかった発表は、夜の部にまわして深夜まで討論しました。こうすることで、ほとんどの発表に1時間以上の時間をかけることができ、例年よりも討論が盛り上がりました(ただし、深夜の会場使用刻限を大幅に超えてしまいました……。今年は発表時間にゆとりがあったせいか、学生からの質問やコメントも例年より多かったと思います。普段、学会ではなかなか質問できないような基本的な疑問をもとに、討論が盛り上がる場面もありました。

本討論会では、中日の午後の数時間をレクリエーションやバーベキューをして参加者の親睦をはかります。今年は、参加者によるJAZZバンド、ギターや三味線の演奏がありました。このような課外活動的なプログラムによって、普段の学会では見ることのできない、参加者の一面を垣間見ることができ、参加者間の距離を縮めるという本討論会の趣旨の達成に一役買っています。

今年の討論会では、発表に対する討論の時間を十分に取ることができました。一方で、新規参加者は4名獲得しましたが、もっと増やしたかったという思いもあります。今回の討論会には、新たな学生も参加してくれましたし、遠方からも学生が参加してくれました。このように学生の参加の機会を作ることができたのも、鳥居基金の援助で交通費・宿泊費の補助を行うことができたおかげです。鳥居基金の援助なくしては、今年の火山性流体討論会を成功裏に終えることはできなかったと討論会の責任者として感じております。ありがとうございました。

## 2009年度第1回「鳥居基金」助成実施報告(TE-63)

氏名(所属): 齋藤裕之(高知大学海洋コア総合研究センター, 現所属: 北海道大学創成研究機構)

助成: 海外渡航(ドイツ)

課題: 第24回国際有機地球化学会議における研究発表

日本地球化学会より「鳥居基金」の海外渡航援助を受け、2009年9月6日から11日の会期でドイツのブレーメンで行われた国際有機地球化学会議(IMOG: International Meeting on Organic Geochemistry)に参加した。IMOGは2年毎に欧州有機地球化学連合(EAOG: European Association of Organic Geochemistry)の主催により欧州で開催される国際会議で、24回目の開催となるIMOG 2009では口頭発表85件、ポスター発表438件(合計523件)の研究発表が行われた。参考までにIMOG 2009の要旨を閲覧できるホームページを記載する(<http://www.marum.de/en/imog2009.html>)。口頭発表のセッションは2部屋で同時進行し、すべてのポスターはコアタイムに関係なく期間中掲示されていた。昼には5つのショートコースや全画面表示 Thermo Fisher Scientific 社の見学会が企画され、私は Terrestrial source rocks and oils と LC/MS in organic geochemistry の2つのショートコースを聴講した。

私は“Microbial Geochemistry I”というセッションで“Microbial biomarkers in deep marine sediments from IODP NanTroSEIZE Site C0001, Nankai Trough, Japan”というタイトルでポスター発表を行った。本研究は2007年の統合国際深海掘削計画(IODP)で得られた熊野灘沖南海トラフの海底堆積物試料を用いて、微生物バイオマーカーと菌数計測



会場前での記念撮影

とを比較した研究である。微生物バイオマーカーの定量はバクテリアとアーキアの細胞膜に特徴的な高分子量脂質を化学処理により低分子量に変換した後、GCで測定した。一般に海底下ではアーキアが優先的に生息していると考えられているが、共同研究者が行った菌数計測の結果、南海トラフ試料ではバクテリアが95%以上を占めていた。それに対し、生きている微生物の指標と考えられる糖やリン酸基などの頭部を持つアーキアのバイオマーカーが有意な量で検出され、菌数計測とバイオマーカー分析の結果は矛盾するという結果が得られた。コアタイムではこの点について数人の研究者と議論することができ、今後の研究に役立つコメントを頂けた。

今回の IMOG ではドイツとオランダの研究グループを中心に LC/MS を用いた研究の発表が多く見受けられた。LC/MS に関係した研究は1999年には数件であったのに対し、今回は100件以上に及んだ。特に古水温指標である TEX86 の有用性についての議論が興味深かった。TEX86 は海洋表層に生息する海洋クレンアーキオータに由来する特徴的なテトラエーテル (GDGTs) を使った指標であるが、海底下に生息するアーキアに由来する GDGTs がこの指標に与える影響、極性頭部の違いによる TEX86 の値の違い、極性頭部のついた脂質分析における不完全な分離など指標として用いるには解決しなければならない問題が多く残されていることが理解できた。

今回、国際会議に参加することで最新の研究動向を知るとともに多くの海外研究者らと議論を交わすことができ大変有意義であった。また、有機地球化学の分野で LC/MS が主流になりつつあるのを実感するとともに、微生物の高分子量バイオマーカーを研究するには LC/MS での分析が必要不可欠であることを痛感する学会でもあった。余談ではあるが、プレーメンからの帰りには飛行機の遅延でアムステルダムに一泊するトラブルに見舞われたが、次の日に初めてビジネスクラスに乗るといった貴重な経験もした。最後になりましたが、海外渡航費用を援助して下さった日本地球化学会と関係者各位に深く感謝致します。

## 2009年度第2回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-65)

氏名 (所属) : 山田健太郎 (東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻)

助成 : 国内研究集会

課題 : 日本地球化学若手シンポジウム2009

今年度の日本地球化学若手シンポジウムは、昨年度と同じ八王子セミナーハウスで開催されました。年会から約2週間後の10月2~4日の会期で行われる予定でしたが、10月2日の夜に体調不良のため早退した参加者から翌日にA型インフルエンザを発症していたとの連絡を受け、3日午前のプログラムを以て中止となりました。しかし、20の研究室から48名(学部生7名、修士課程31名、博士課程9名、PD1名)の参加登録があり、20件のポスター発表、14件の口頭発表の応募をいただきました。また、蒲生俊敬先生(東京大学・日本地球化学会会長)、酒井聡樹先生(東北大学)、太田亨先生(早稲田大学)に招待講演を引き受



写真1 集合写真



写真2 蒲生先生の講演を聴く参加者

けていただきました。結果としては10件のポスター発表、3件の口頭発表、蒲生俊敬先生の招待講演を以て中止となってしまいましたが、ポスター発表や懇親会を通して参加者同士が大いに議論や交流を行っていた様子が見受けられました。特に「ゲリラポスター」と称して、会場の空いているスペースに持ち込んだポスターを貼って議論をしている様子が印象的でした。また、シンポジウムの続行・中止を決める話し合いは長引いたのですが、その間にも参加者同士が議論を交わしたり、積極的に交流をしている様子が見受けられました。このような参加者の態度が、今回の若手シンポジウムの一番の成果と言えるでしょう。

また、学生にとって研究生活とは何なのかを改めて考えてもらうため、Exセミナーを設けました。進路決定の動機・研究生活での浮き沈み・自分が所属する研究室の良悪についてグループごとに議論し、その後全体の前で発表してもらうという、昨年度とは異なる内容・形式となりました。こちらもシンポジウム中止のため行うことはできませんでしたが、参加者へ質問内容をメールで配信し、返信された結果を取りまとめ再び参加者へ配信することにしました。これによって自分と同じような境遇の人がどのような考えを持って研究生活を送っているのかが分かり、参加者にとって、今後進路を決める時や研究生活に困った時に自分はどうすればよいのか、ということを考えるためのヒントになるでしょう。

今年度の若手シンポジウム事務局は、東京工業大学吉田研究室の学生を中心として構成されました。昨年度と同様に役割分担に力を入れ、進捗状況の報告を細かく行うことで綿密なプログラムを作り上げることができました。そして広報にも力を入れ、ポスターを作りPDF形式で配信したり、多くの研究室にメールで直接声をかけた結果、幅広い分野からの参加者を募ることができました。来年度もまた多くの若手研究者に積極的に参加していただき、若手同士の交流が盛り上がることを期待しております。

最後になりましたが、本シンポジウムは鳥居基金の助成によって実行することができました。誠にありがとうございました。

## 2010日本地球惑星科学連合2010年大会

2010年連合大会のお知らせをいたします。

期間：2010年5月23日(日)～28日(金) 6日間

会場：幕張メッセ国際会議場

早期参加登録受付期間：2010年4月9日(金)まで

詳細は以下のホームページをご参照下さい。

<http://www.jpogu.org/meeting/index.htm>

割引が適用させる早期参加登録受付期間を過ぎると通常参加登録(2010年4月10日～5月28日)となり、一般会員で2,000円、小中高教員と大学院生・研究生で1,500円割高となります。なお、学部生以下及び70歳以上の方は、発表の有無にかかわらず参加費は必要ありません。学会当日に会場1階の総合案内にお越し下さい。



### 院生による研究室紹介 No. 15

北海道大学低温科学研究所 大気環境分野  
環境地球化学研究室

藤原真太郎

みなさんこんにちは。今回は冬真っ盛りの北海道札幌から、北海道大学低温科学研究所大気環境分野環境地球化学研究室(河村研究室)の紹介をさせていただきます。

河村研究室は、河村公隆教授、関宰准教授、宮崎雄三助教の3名の教員、ポスドク4名、大学院生6名(博士課程2名、修士課程4名)、共同研究員2名、実験補助員2名と秘書1名の合計18名で構成されています(平成22年2月現在、写真1)。因みに、研究室は北海道大学大学院環境科学院地球圏科学専攻物質循環・環境変遷学コース(長いっ! 英語名はCourse of Geochemistryです)にも所属しており、大学院生の肩書きはこちらとなります。

私たちの研究グループでは、大気や堆積物中に含まれる有機物を主要な研究対象として、それらの環境での化学的・生物地球化学的諸過程を明らかにするこ



写真1. 河村研究室のメンバー（前列左から）Jung さん、宮崎先生、関先生、河村先生、Kundu さん、立花さん。（後列左から）筆者、澤野さん、黒木さん、Paula さん、Mouli さん、He さん、山本さん。

とを目指しています。具体的には、大気エアロゾル（微粒子）を中心として、雨・雪・氷床コア・堆積物中に含まれているアルカン・アルケノン・脂肪酸・低分子ジカルボン酸やモノカルボン酸など、数多くの有機物を分析対象としています。これらの化合物は、起源や環境中での反応のトレーサーとして用いることが可能で、測定を通して地球環境への影響を評価していきます。

例えば、大気エアロゾル中に含まれる有機物は、組成が多種多様であり、雲凝結核として働くことで気候や気象に大きな影響を与える可能性が示唆されています。しかし、大気中での反応メカニズムや組成分布に関しては不確定な部分が多く、それらの理解が重要な研究課題とされています。そこで本研究室では、主にGC（ガスクロマトグラフ）を用いて有機化合物の検出・同定を行っています。前処理により試料中から抽出した化合物をGCカラムで分離し、質量分析計に導入する事で各化合物の同定を詳細に行うことが可能となります。本研究室では、ガスクロマトグラフ（Agilent GC7890他）、ガスクロマトグラフ／質量分析計（Agilent GC7890/MSD5975, ThermoQuest TRACE GC/MS）を駆使することで、環境試料中に、これまでに報告の無かった未知化合物の同定を行うなど数多くの成果を挙げてきました。

その他にも、全有機炭素測定装置（SHIMADZU TOC-V CSH）、イオンクロマトグラフィー（Metrohm 761 Compact IC）、高速液体クロマトグラフ／質量分析計（Agilent 1100 series LC/MS）、エアロゾルカーボン分析装置（Sunset Laboratory）など、研究室の

多種多様な実験装置を用いて測定を行うことで、試料を様々な観点から分析し、有機物が関与した地球化学的な現象をより深く理解しようとしています。

また最近では、試料から分離された化合物に対して、GC/IR/MSを用いて分子レベルでの安定炭素同位体比および水素同位体比の測定を行うことで、化合物の起源や、大気中での変質に関するより詳細な議論を行う事を可能にしました。

海外の研究機関との共同研究も盛んに行われています。対象とするフィールドも、国内（北海道内を始め、沖縄、富士山など）に留まらず、国外（中国、東アジア上空、北極域、そして南大洋など）の場合も多く、様々な地域を網羅した研究を行っています。試料は主にメンバーが実際の観測に参加して採取しますが、共同研究機関に協力してもらうこともあります。また、研究所の屋上や札幌近郊に位置する森林総合研究所において定期的なサンプリングも実施しております。

他にも、CCN（雲凝結核）カウンターやHTDMA（Hygroscopicity Tandem Differential Mobility Analyzer）を用いたエアロゾルの雲凝結核能の研究や大気反応実験などの室内実験系や、森林・水圏における物質循環など、有機分析、同位体比解析の技術を活かし、現在も様々な方向に研究を発展させております。

学生の場合、どの観測に参加するかは各自の研究テーマ次第となります。私は昨年夏に富士山でのエアロゾル観測に参加致しました。また、先輩には白鳳丸に長期間乗船して観測をされた方もいらっしゃいます。河村研では、フィールドに出たい人も、室内で実験を行いたい人も、それぞれの研究方法を選ぶ事が可能です。

そんな研究室の雰囲気を一言で言い表すならば、「多国籍！」です。研究室には、中国、韓国、インドなど、アジアを中心とした7名の外国人研究者および留学生が在籍しています。最も遠く離れた場所ではフィンランドからの留学生と一緒に研究をおこなっており、昨年夏にはフランスからの研究者が数ヶ月間滞在するなど、海外との交流はかなり盛んだと言えます。そのため、研究室のゼミは主に英語で行われ、日常会話においても様々な言語が飛び交います（写真2）。研究室の公用語が英語のようなもので（ちょっと大袈裟ですが）、英語さえまならない僕は、入学当初日本に居ながらにして留学しているような気持ち



写真2. 研究室セミナーのひとつ。セミナーは教員、ポストドク、学生が参加して毎週月曜日の午後に行われる。各自研究の進捗状況の報告や論文のレビュー、最新の論文紹介などを行う。セミナー中も日本語と英語が飛び交う。



写真4. ポストドクの山本さん。エアロゾル試料の前処理作業中。



写真3. フィンランド人留学生 Paula さん。雪中のn-アルカン組成を研究中。マツの葉からn-アルカンを抽出し、観測地点近隣の植生が試料に与える影響を評価する。



写真5. 河村研究室が誇る4台のガスクロマトグラフ (Agilent 7890, 6890 N, 6890×2)。数多くの有機物試料の分析がこの部屋で行われる。

になる事もしばしばでした。でも、もちろん先生方や日本人同士でのコミュニケーション、日本人のゼミ発表は日本語で行われるのでご安心下さい。また、研究に疲れた時は、研究室のオアシスである秘書の神田さんを始めたメンバー間での雑談や、飲み会、ジンギスカンパーティー、河村先生宅でのホームパーティーなど、多彩な研究室イベントを通してリフレッシュしています。

河村研究室は北海道大学の北の外れの（有名なクラーク像とは正反対の立地）、低温科学研究所内に位

置しています。交通の便はあまり良くないのですが、周囲は、夏にはシラカバの林が美しく、冬には一面の雪景色など北海道ならではの風景が広がっています。

残念ながら、紙面上では研究室のごくごく一部しか紹介することが出来ません。興味を持たれた方は、研究室のホームページ (<http://environ.lowtem.hokudai.ac.jp/index.htm>) を併せてご覧頂くと、私たちについて更に理解していただけたと思います。大学院の受験も歓迎です！そして、札幌にお越しの際は是非一度お立ち寄り下さい。研究室員一同お待ちしております！

以上、修士課程1年の藤原が執筆いたしました。

### ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会，書評，研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上，電子メールでの原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2010年6月頃を予定しています。ニュース原稿は4月下旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会ニュース・HP 幹事）

谷本 浩志

〒305-8506 茨城県つくば市小野川16-2  
国立環境研究所  
アジア自然共生研究グループ

Tel：029-850-2930／Fax：029-850-2579

E-mail：news-hp@geochem.jp

鈴木勝彦

〒237-0061 横須賀市夏島町2-15  
海洋研究開発機構（JAMSTEC）  
地球内部ダイナミクス領域研究（IFREE）

Tel：046-867-9617／Fax：046-867-9315

E-mail：news-hp@geochem.jp